

令和6年2月12日

佐々木 朗

LGBTQ+のこどもとおとな～

“生きづらさ”をなくすために、周りの人ができること“

1 日時 令和6年2月12日(月) 13:30～16:00

2 場所 北海道教育大学函館校

3 内容

- (1) 講義 LGBTQ+のこどもとおとなからおとなの生きづらさ・家族と仕事を中心に 弁護士 皆川 洋美さん
- (2) 講義 子どもが「自分」を豊かにするための学校と教育の課題 北海道教育大学教授 木村 育恵さん
- (3) トークセッション

皆川 洋美さん、木村 育恵さん、

前田 邦博さん (NPO 法人プライドハウス東京理事)

全体司会 一般財団法人にじいろほっかいどう理事長 国見 亮佑さん

4 内容のまとめと感想

正直、今回の研修は、難しかった。わからないことが、話を聞いてもなかなか理解できなかったと思う。

まず、皆川先生のお話から。テーマは自殺。自殺が一番多かったのは平成10年代、平成22年まで毎年3万人を超えていた。割り算をしてみると一日に82人の方が自死を選んでいることになる。その後減少し、令和に入るところは、年間2万人ぐらいまでになった。しかし、その後微増し、令和4年は、21881人(一日約60名)となっている。男女比では、男性が女性のおよそ2倍となっている。この比は、時代の流れがあっても変化はあまりない。また、自殺死亡率(人口10万人ありの志望者数)は、令和4年では、24.3人となっている。これを仮に函館市に当てはめてみると、61名という数字が出る。

年齢別に、令和3年と4年を比較すると、10代、40代、50代、60代で増加している。特に50代は475名も増加している。

仕事をしているかどうかで比較すると令和4年では、仕事をしている人が8576名、仕事をしていない人が11775名となっている、前年度と比較すると、仕事をしている人の方が仕事をしていない人の4倍以上の増加となっている。

自殺の原因は、令和4年では、健康問題、家庭問題、経済・生活問題、勤務問題、男女問題、学校問題の順となっている。LGBTQ+はこの中には分類されていない。

自殺の原因のうち仕事と経済に関わる事項の男女比は、6.1:1、11.6:1となっており、前述の2:1とは大きく異なっている。

自殺は、その多くが追い込まれた死である。自殺に至る心理は、様々な悩みが原因で、心理的に追い詰められ、自殺以外の選択肢が考えられない状態に陥ることや、役割喪失感あるいは過剰な負担感から、危機的な状態に追い込まれてしまう過程ととらえることができる。

自殺行動に至った人の直前の心の健康状態をみると、大多数は様々な悩みにより心理的に追い詰められた結果、抑うつ状態にあたり、うつ病、アルコール依存症などの精神疾患を発症していたりするなど、これらの影響により正常な判断ができない状態となっていることが明らかになっている。

職場でかなり追い詰められたりすると労災が適応になることがある。

木村先生のお話から。

高校生の男女のお話。高校生の女子が男子生徒に「好きです。付き合ってください。」それに対して、男生徒が、「ごめん、実は・・・」の後を考える問題。この問題の答えは、「実は、女性を好きになれないんだ。」ということであった。2016年の愛知県の人権週間啓発ポスターポスターである。

そして、キャッチフレーズがあなたの「」と私の「」はちがう。それを私たちの「」にしよう。

「」には同じ言葉が入ります。たとえば、「普通」。

昔から男らしさ、女らしさというのが言われてきました。男らしさでいうと、元気、リーダーシップがある、力が強い、いっぱい食べる、甘いものが苦手、口数が少ない、気が強い、お酒が好き、性欲が強い、家族を養う。女らしさでいうと、魅力がある、気配りができる。小食、理数系が苦手、おしゃべり、甘いもの好き、涙もろい、男を立てる、お酒が弱い、性欲がない、子どもが好き。

男女のサークル仲間で茶店に行った。男性は甘いものが好きで、パフェを頼んだ。ところがパフェはいつも女性の前に出された。

社会や文化の中で、性別や性の違いについて、私たちが「当たり前」だと気づかずに考えていることや価値半などの話を「ジェンダー」と言う。

性的役割分業意識の解消 「私は保育士です。パートナーはトラックの運転手です。家事や育児を分担しようと思いますが、なかなかうまくいきません。」どんな情景が浮かぶかというと、女性が保育士で、トラックの運転手が男性と思いつかべた方が多いのではないのでしょうか」その逆も当然ながらあるわけである。

このような文化の背景には、教育の問題も大きいと考える。子どもを教育する前に親や教員の教育も必要である。現在の学習指導要領においては、性役割について明確に指導項目になっていないため、教員の養成でも必須ということではないという現状がある。学校現場においても、「女性管理職」などという言葉があり、現実的に女性の割合が少ない。教育においてもいわゆる「隠れたカリキュラム」で無自覚のままジェンダーに関わる教育が行われていると考えられる。掲示物の色別もそうである。私自身も男子は、青系統、女子はピンク系統にした経験を多くもっている。



世の中の「当たり前」や「自然」は、本当に「当たり前」なのか「自然」なのかを考えてみるのが大切。出生時の性別に合わせて生きるのが当たり前（自然）。異性を愛することが当たり前（自然）、世の中には男と女の2種類しかない。男らしく女らしくするのは当たり前など。しかし、その人らしさ、その人の自然があり、性についても、人の数だけバリエーションがあると考えることができる。

性には、①出生時に割り当てられた性、②自任する性、③性的指向、④表現する性などが考えられる。

2021年の埼玉県の調査によると、ゲイ・レズミアン・同性愛者は0.4%、バイセクシュアル・両性愛者は1.8%、アセクシュアル・無性愛者が0.9%、決めたくない・決めていないが5.6%、トランスジェンダーが0.6%というデータがある。

LGBTとは、レズビアン、ゲイG、バイセクシュアルB、トランスジェンダーTの4つの頭文字を並べた愛称。セクシュアリティが決まっていなクエスチョニングのQ、さらにあらゆる制の在り方を包括した+をつけて、LBGTQ+と言われる言葉がよく使われている。

LBGTQ+の方は、いじめ、暴力、差別的発言、ハラスメントを受けやすい。周囲の無理解。それによって、自尊心が蝕まれ、学校や職場にいづらくなり、自傷行為、過剰服薬、精神疾患、そして最悪の場合、自殺に追い込まれたりする。

いじめは、中2がピーク（6割が経験）であるが、小学校1年でも（2割が経験）発生している。

性的にマイノリティーの方にとって、笑いの対象になったり、その話が出ると当事者探しをされたり、「らしさ」を無理やり求められたりする。制服がいやで

学校へ行けない。ランドセルの色、体操服、上履きなどでの区別。身体測定、水着、着替え、宿泊研修などの入浴などでの支障。自分のことが自分でもよくわからない。自分でも受入れられない。いじめや好奇の目が怖い、親に心配をかけたくない、一人ぼっちで苦しみを抱えているなどがある。罪悪感、居づらさ、息が詰まるような毎日を過ごすことがある。将来、社会的に不利にならないだろうか、どう生きていけばいいのかわからないなどの悩みを抱えている。

教育現場で困りやすいこととして、①男女で分けられていること、②「いないこと」になっていること、③正しい知識にアクセスできないこと、④身近に相談できる人がいないこと、⑤自分の生きていく姿が思い描きにくいこと、が挙げられている。

私たちはジェンダーに敏感な視点を大切にしなければならない。性差はあるが、それが私たちの存在や人格の全てではない。「ジェンダーに敏感な視点」とは、こうした性別や性の違いに対する「当たり前」に気づいて、「男女が全く異なる状況におかれていることに敏感になり、それをとらえなおす視点のこと。

「性の在り方は多様なのだ」ということを前提に、「セクシュアル・マイノリティーはかわいそう」ではなく、「そもそも多様なものにおかしい」「セクシュアル・マイノリティーの人たちの問題」ではなく、「変わらなければならないの



は、周囲（私たち）だ」ということを学ぶことが重要である。

私も含めて、性に対しても「当たり前」それが「自然」という文化を持ってしまっている。生活の中で一つ一つのことにもう一度目を向けて考えていくことを大切にしなければならない。また、ジ

ェンダーについても、いろいろと思いや考えはあるが、人として、大切にしてい

く気持ちをこれからも持ち続けていきたい。

令和6年2月12日執筆

佐々木 朗